

Title	服部英太郎著作集VI 社会政策総論
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.8 (1967. 8) ,p.987(153)- 988(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19670801-0153
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670801-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670801-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の基本問題は、単に証券市場の基礎範疇としてのみ提起されうるのではなく、信用形態としてとらえうことによって、信用の基本問題に深くかかわらしめて提起されるのでなければならない。

(1) 株式会社が、信用関係から規定されるということとは、株式会社の一面であるにすぎないと、いう理解がある。なるほど、株式会社は、企業の形態、資本の結合形態であり、信用関係とは直接的には結びつかない。しかし、株式会社は、産業資本の資本蓄積過程に基礎を

おいて形成されてくる以上、この資本蓄積過程の横軸をなす信用と無関係ではない。また、資本論体系中に株式会社論を位置づけるうえからも、信用規定が、その基本的規定とされねばならない。

(2) 商業信用は流通過程で、本来遊休すべき資本の融通関係であるとする見解（宇野弘蔵氏）やその要因のみでは、この形態の説明に

とて不十分だとして、さらに信用関係の相互性をも重視する見解（日高晋氏の「商業信用と銀行信用」一九六六年、一一四頁）は、いずれも支払のための予備金を商品生産者・産業資本家から解放するという考えに立脚している。商業信用における手形が、銀行信用から一応別個に抽象化されて論じられる場合、こうした想定にはなお、疑点が残る。

(3) 銀行資本の蓄積は、信用体系と競争体系との相互規定的関連において遂行される、独自の蓄積過程である。銀行信用の担い手として、銀行は、受けける信用と与える信用による再生産過程での、個別諸資本の連関を媒介するが、同時に、その連関は、競争による産業的企業の利潤率の変動を通じて再生産されている。したがって、これを媒介する信用自体も、競争に規定されて変動を余儀なくされる。これは銀行諸資本の競争となつて、銀行資本蓄積を促し、貨幣

市場に作用を及ぼすことで、利子率の水準に反映する。

(4) 「けだし貨幣市場では、たえず、あらゆる貸付可能な資本が総量として機能資本に対立し、したがって一方では貸付可能な資本の供給と他方ではこれに対する需要との比率が、その時々の市場利子状態を決定するからである。信用業の発展にしたがつてまた集中が、同時に貨幣市場に投するようになればなるほど、ますますそぞである」(K. Marx, *Das Kapital*, Bd. III, S. 400, 訳、五五頁)といふマルクスの指摘は、このさい重要な意味をもつ。とくに、銀行業の発展が、貨幣資本をますます市場に吸引せしめるという点は、銀行業の内容、銀行信用の変質自体をも、内含していると考えねばならない。

(5) 銀行信用は短期的貨幣資本の融通という点で、信用体系の競争体系への対応を十分果しえない要因を基本的に有するかのごとくである。マルクスの指示にあきらかなように、銀行信用の一環としての信用創造業務は、自らこの不備を開拓するものとなる。マルクスは、こうした方向に、仮空な資本の形成をみていた。

〔付記〕 本稿の要旨は、今春証券経済学会関東部会で報告した。

## 新刊紹介

服部英太郎著作集VI

### 『社会政策総論』

本書は服部教授の遺稿のうち、教授が、戦

前および戦後にわたる、東北大学と福島大学

における社会政策講座の講義案としてつくり

れたノートを主要な内容としている。解題

によれば、「著者が始めて社会政策論の講

義を担当したのは大正一四年（一九二五年）

であるが、それから昭和四〇年末（一九六五

年）、急逝による講義中絶にいたるまで、ド

イツ留学の一ヶ年、強権による教職剝奪、病

歎生活の四ヶ年を除いて、実に三五ヶ年にな

たつて社会政策論の講義をつづけてきた」。

本書では、第一部として昭和一五年以降の講

義案、第二部として、昭和二四年以降のもの

第四章 社会政策の高度発展形態——労

第一編 社会政策の先行形態——初期資

第二編 社会政策の成立・発展および現実

第三章 社会政策の端初形態

第四章 社会政策の高度発展形態——労

一五三（九八七）

が集成されている。大凡の目次を示すならば、

労働組合をめぐる社会政策の必然性および限界

新刊紹介

ソスの文化現象を把握することができ、これは通説に對する有力な反論となりうるである。しかし、またルネサンスを資本主義の萌芽的な歴史的展開であるという見解に對しては、それがどうして一九世紀の後半まで、すなわちリソルジメント期まで近代化がおくれたのであるかという疑問をさしはさむことができよう。つまり先ほども述べたように、ボーボロ・グラッソ（あぶらぎつた市民）という呼び名が物語る退廃的な商人像のなかにルネサンスの文化現象を見いだすとき、そこに近代的な産業人の姿を想像することはできず、むしろこのことは、当時の経済の本質が決して近代資本主義の基盤にたつていなかつたどころか、その方向にさえむかつていなかつた事実があつたがゆえに、その後の経済的な発展が阻止されてしまつたといえるのである。

このような疑問をあきらかにするために、ルネサンス期における北部および中部イタリア諸都市の工業的繁栄を代表する産業を毛織物工業と絹織物工業と考えて、これら工業のなかにはたして資本主義的な萌芽を見いだす

担からの解放を意味した。……彼の科学としての社会政策の積極的内容を構成するものは、特に独占資本制のもとにおける巨大経営のための熟練労働力の培養、その陶冶への関心であり、大経営における労働過程の自然科学的実験調査、約言すれば社会政策論の労働科学への転化であった。すなわちマックス・ウェーバーにとっては、科学としての社会政策・経済政策は、帝国主義段階における世界市場獲得のための経済的・社会的条件を「没価値的」に検討すること、すなわち手段の適合性を検討し、その結果を予め測定し、そしてまた随伴的諸現象を考慮することを、その課題となすべきものであったのである。ウェーバーの没価値性論の積極的な面は、このように世界市場をめぐるドイツ独占資本主義の経済的・必然的に規定せられたものであった（一〇一頁）。まことにきびしいウェーバー批判ではないか。このようなウェーバー批判の上に立って、さらに大河内教授の社会政策論に立てる徹底的な批判を、第一編第二章第三節社会政策における生産力説批判の課題およ

森田銚郎著

び第四節社会政策の本質把握の問題——方法論争の展開、のなかで展開している。社会政策論に关心を有する諸君の熟読をおすすめする。(未来社、一九六七年三月刊・A5・三一九六頁・一、六〇〇円) 一飯田 鼎—

\* \* \*

森田鉄郎著

『ルネサンス期イタリア社会』

この本は、これまで世界の多くの歴史研究者が幾度となくとりあげ、しかも定説を確立することができない「ルネサンス期の歴史的特質」という問題を、従来の諸研究を網羅的にとりあげて検討批判している。そればかりではなく、この本は、その社会的な背景と結びつけながら、ルネサンス期の歴史的特質をうきぱりにすると、新しい角度からの分析を企てた労作でもある。

まずこの本はルネサンスとはなにかという

この本は、これまで世界の多くの歴史研究者が幾度となくとりあげ、しかも定説を確立することができない「ルネサンス期の歴史的特質」という問題を、従来の諸研究を網羅的にとりあげて検討批判している。そればかりではなく、この本は、その社会的な背景と結びつけながら、ルネサンス期の歴史的特質をうきぼりにするという新しい角度からの分析を企てた劳作でもある。

まずこの本はルネサンスとはなにかという問題提起をめぐって、ブルクハルトの古典的な研究をはじめ、最近の研究者をもふくめた多くの歴史研究者たちの主張と論争とを回顧

ことができるであろうか、そしてこれら工業がはたして資本主義への傾斜を示していたであろうかについて検討している。その結果、もつとも資本主義的な性格をもつていたと考えられているフィレンツェの毛織物工業と綿織物工業についても、資本主義的産業とよぶ要因は存在せず、むしろギルドの強い枠組にしばりつけられたものであり、そのような規定は不适当であると述べ、ましてフィレンツェよりもギルド的な手工業性を強く示していたほかのイタリア諸都市の織布工業は、資本主義的産業とよぶ状態からほど遠いものであつたと述べている。さらにもつと積極的に、イタリア中世都市の織布工業は今日の資本主義の形成とほとんど共通性をもたないものであるとも主張でき、そのような理由があつたからこそ、その後のイタリア経済は一九世紀の後半まで衰退の一途をたどつていたと主張し

ここでこのようなイタリア中世都市の繁栄とその後の発展をばんだものはなにであるか、すなわちイタリア諸都市の工業が高い生産力をもちながらも中世的なギルド的性格